



名寄市立大学の窓から

知への誘い

vol.99

入院中の子どもの学びの場について

保健福祉学部 社会福祉学科

准教授

中澤 なかざわ

幸子 さいし

病院内に学校を開設している病院があるということ、ご存知の方も多いかと思いますが。病院の中にある学校を大きく分けると、病院に併設されている「病弱特別支援学校」、その病院を校区に含む小中学校が病院に開設している「病弱・身体虚弱特別支援学級」、病院近くの特別支援学校から病院に教師が派遣される「訪問教育」などがあります。いずれの場合も、入院して治療を必要とする子どもが、教育を継続して行うための学び（以下「病弱教育」）の場で、道内でも、いくつかの病院に設置されています。

そのような病弱教育の場に出会った、Kさんについてお話しします。



Kさんは、明るく、ひょうきんで、元気に走り回っている子どもでした。小学1年の秋に突然、意識不明となつてしまい、病院へ運ばれ長い入院生活が始まります。その後、意識こそ回復したものの、視力を失い、自分の意思で体を動かさず、ほぼ寝たきりの状態となつてしまいました。聴いたり、話したり、表情を変えたりといった能力は残っていました。人工呼吸器を装着され、発する言葉は無声音でした。そして、入院した当時は、病院内に病弱教育の場がなく、長い間学校教育を受けられず、家族と医療関係者以外の関わりはありませんでした。小学4年になり、近隣の特別支援学校の先生が訪れ、週に2回程度の訪問教育が受けられるようになりました。その2年後、小児

科棟棟プレイルームの半分を教室として間借りし、病弱特別支援学校の分教室が設置されました。このことにより、体調が安定している日には、一日の大半を過ごしている病室のベッドを離れ、学校の教室に登校し、同年代の友だちと一緒に学んだり、遊んだりという時間を過ごす生活に変わりました。Kさんは、中学部の卒業文集の中で次のように述べています。

入院したときは、毎日暇だった。たいくつだった。つまらなかつた。だが僕に、突然幸運が訪れた。学校ができたのだ。それからは毎日学校へ登校し、色々な勉強をした。友だちも増え、ゲームなどを一緒に遊んだ。毎日がとても楽しかった。

多くの子どもにとって、学校で友だちと学んだり、遊んだりという生活は、日常で当たり前にあることです。でも、入院をすると、その当たり前が失われます。そして、病室も抱え不安と絶望を感じます。そのような子どもにとって病弱教育の場があることで、学んだり、遊んだりという日常の一部が継続され、患者ではなく、一人の子どもの時間として当たり前になる時間を過ごすことができます。その中で、子どもの不安が和らぎ、生きる意欲につながるのではないかと思っています。しかし、長期入院中の小中学生の約4割が、何の教育的支援も受けていないという現状の調査報告もあり、病弱教育の場は未だ十分に整ってるとはいえません。入院中の全ての子どもが学びを継続できるような、教育体制の整備が進められていくことが望まれるのです。

※参考文献
文部科学省(2015)
長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査



大学図書館へようこそ！

昨年、新型コロナウイルスの影響で卒業式が中止になりました。現在の状況では、今年は開催時間短縮、出席者限定で3月18日(木)に行われる見込みです。市民の皆さま、コロナ禍で本学学生を物心ともにご支援いただきありがとうございました。

【3月の開館について】
日曜日と春分の日(20日)は休館です。
3月中は月～土曜日の9時～17時までの短縮開館です。

大学図書館へようこそ！

大学図書館にはこんな本があります
～〈「知」への誘い〉からもう1歩～

「訪問教育、病弱教育ってな～に？」と興味を持たれた方へ入門的な図書を紹介いたします。
『空への手紙 病弱教育理解のために』1巻、2巻
福田 素子/作、横田 雅史/編著 ジアース教育新聞/編
→院内学級の新任教師が、子どもたちと共に成長する物語。教材目的で複製された漫画。TVドラマ化もされました。
『せんせいが届ける学校 訪問教育入門』
全国訪問教育研究会/編著 クリエイツかもがわ
→訪問教育ってどんな授業をしているの？その内容や工夫、地域支援などを紹介しています。
『ひろがれ病院内学級』
御子柴 照治・渡辺 美佐子/編著 桐書房
→親、医療者、教師、心理学者がそれぞれの立場で執筆した院内教育実践記です。

◆問い合わせ
名寄市立大学図書館 01654@7671(直通)
ncu_library@nayoro.ac.jp

